

## ブタと水、そして猪八戒

コンサルタント Info Box 津田 謙 二

### ブタは水畜

今年、1999年のはじめ、われらがブタ仲間、自称“とんじ”こと元駐エジプト大使の片倉さんと恒例のブタ情報交換会を持った。とんじ氏、年始めはニューヨークに行き、あわせて書店を歩いてブタの本やカレンダーを探して来て下さった。

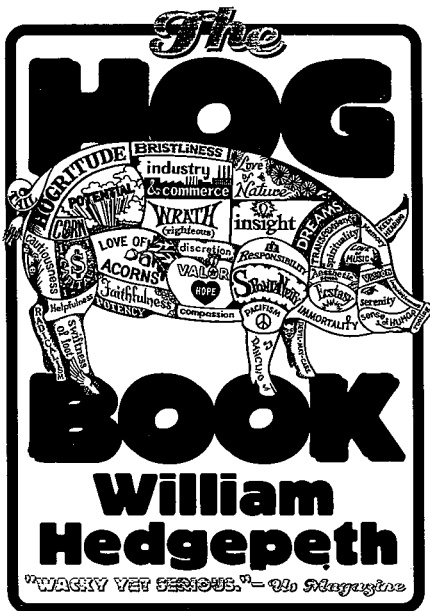
その本のひとつ、The Hog Book (著者 William Hedgepeth 1998年1月刊) の書き出しがよい。ニューヨーク・タイムスのコラムの“ブタのミステリー”が紹介されている。

すなわち、2匹の成長したブタが明け方のマンハッタン南部の道路を歩いているのを見かけた人がいるというのである。届け出によりニューヨー

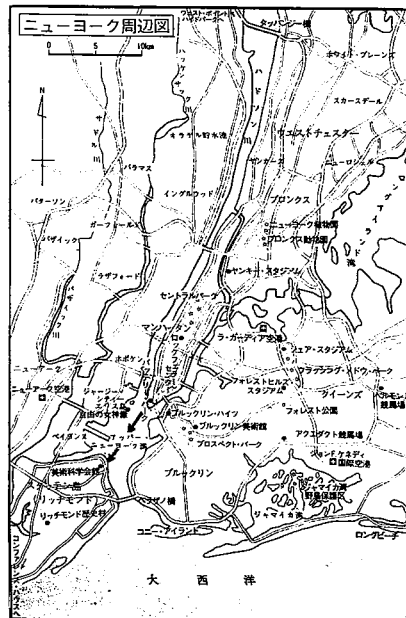
ク市警は早速捜査を開始、散々探したが発見できなかった。その日の夜おそく、水路を隔てたスタッテン島に同じ2匹が現れた。いったいどうしてこんなことになったのか、ブタの水泳能力は知られているが、でも、ちょっと考えられない事件である。明らかに言えることは、スタッテン島にわたるフェリーに乗って行ったに違いないということだ。変装して行った？ にしてもどうやって切符を買ったのか。あれこれ考えると頭がおかしくなってくる。これはまさしくミステリー。

なる内容である。

アメリカの新聞は時として大まじめ？ な扱いで



The Hog Book



ブタの泳いだ？ コース

ユーモラスな記事を掲載する。これもそのひとつではあるが、この内容を耳にした筆者は“もしかすると泳いで行った?”とってしまった。なぜなら、ブタは水にとっても縁が深い動物だからだ。今の飼育システムではほとんど見ることもできず忘れ去られている習性の中に、ブタと水との深い関係がある。

現にブタは動物の中では水泳が得意である。難破船から逃れたブタが陸地に到着した例も知られている。それに、大食漢であるブタは脂肪が堆積すると、その脂肪層のため身体の発熱がおきて、それを冷やすために水に入ったり水を浴びたりする必要があるとされている。この水浴びをブタの清潔好きによるものと見る説もあり、これも理由のひとつかもしれない。

それに、ブタの祖先であるイノシシは、野生状態では排泄の70%を谷川の流れて行くと報告がある。水洗トイレの先駆、というよりも野生動物としての自分の痕跡、特ににおいを残さぬための知恵らしい。こうした行動の慎重さの中にも、イノシシ、ブタに共通する伶俐さを見てとることができる。

ともあれ、他の動物に比べて水に縁の深いことは間違いなく、これが乾燥地、砂漠の文化、宗教になじまず、5千年以上前にブタが飼われ愛されていたエジプトで、その後の乾燥化、森林の消滅とともにブタ飼育が衰退する原因になったと考えられる。

ところで、早くからブタを家畜化してきた中国では、その習性はよく観察されており、ブタを“水畜”と位置づけている。例えば明時代に李時珍が編集した博物学の集積ともいえる「本草綱目」の中に、五行思想、つまり万物を木、火、土、金、水

に分類する中で、家畜を次のように分類している。

木……………羊  
火……………禽（鳥類）  
土……………牛  
金……………犬  
水……………猪（すなわちブタ）

なお改めて申し上げるまでもないが、中国ではブタのことを“猪”と書く。イノシシは“野猪”と記される。だから西遊記に登場する猪八戒はブタなのである。これについては詳しく後述する。

こうしてブタとの関わりが深くかつ長い中国では、ブタを表す漢字も多く、後漢時代の許慎による中国最初の字書「説文解字（せつもんかいじ）」にはブタを表す字が30以上も載せられ、中国古代の辞書「爾雅（じが）」、前述の「本草綱目」、清代の「古今圖書集成」にもブタを意味する漢字は多く記されている。雄、雌、そして仔ブタの第一子から第二子……末っ子まで別々の字が与えられ、また地方ごとの呼称の違いもあってその関わりの深さに驚かされる。

筆者がこれらの調査の中で見出したのが「潚」と「漚」。いずれも猪と同じ発音で、意味は“水たまり”である。念のために最近出た「中日辞典」（愛知大学編、発行は榊大安）を調べるとやはり出ている。この字の存在は、ブタが水（時には泥水）を浴びたり、水に身体を浸すのが大好きであ

〔潚（漚）〕 zhū ☒水たまり。  
〔楮・櫛〕 zhū ☒かし（櫛）  
〔槩（槩）〕 zhū →〔槩jié槩〕

「中日辞典」（大安刊）p.1889より

るとの証拠と言えるのではないか。

そういえば山歩きの好きな筆者は、20年ほど前に道なき山を歩いた時、おやと思うほどよく踏まれた道に出逢い、たどって行ったことがある。そこには水たまりがあり、その先は人はくぐり抜けられぬ茂みのトンネルに続いていた。そうだ、これは獣道、それもイノシシの通路だったのだ。「瀝」を目撃していたのである。

新しいところでは、最近封切られた映画「ベイブ都会へ行く」に、心優しいブタのベイブが水に飛び込んで、以前自分を追い回した犬を助けるシーンが出てくる。やはりブタは「水畜」なのだ。

さて、マンハッタンに出現した2匹のブタが、無賃乗船をせずにはアドソン河を泳ぎ渡った可能性についてやはり気になる筆者はニューヨーク周辺の地図を調べる、うーむ、右に自由の女神を眺めながら泳ぐにしてもスタッテン島まで約7キロの行程、これ、ちょっと遠いな、泳げぬことはないにしても、2匹連れだったから泳げたのか？もしかしらブルックリンまで橋を渡って行けば泳いで2キロの行程、いや全部橋づたいにも行けるが、どこかで泳いだと考えたい。……などと筆者はそれなりにブタのミステリーを楽しむのである。

### 水の将軍、猪八戒

このブタと水の関わりを決定的？ならしめるのは中国の小説「西遊記」であろう。ここに登場するキャラクターの中で、なんとも親しみを覚える、人間の欲望、煩惱ともいえる欠点を一身に背負って健気に三蔵法師のお供をするのが、ご存じ“猪八戒”だ。

西遊記といえば、三蔵法師がインドの経本を中

国に持ち帰るべく14年以上にわたる苦勞の旅の物語である。そのもととなる玄奘三蔵著「大唐西域記」は筆者も現在目を通していているが、その内容の正確さに後の西域探検家たちが驚嘆している。

この中のお供のひとり沙悟浄は川から出現したことから河童の化身とされているが、これはあくまで日本風アレンジであって外国には河童のイメージはない。現に沙悟浄は水の中で暴れることはない。むしろ旅に出現する妖怪どもとの戦いで相手が水中に逃げ込むと孫悟空は手の下しようがなく、猪八戒がお任せとばかりに活躍する。時には井戸の中、地下水脈の先の水晶宮にまで入り込んで妖怪を痛めつけ、あるいは地上におびき出して協力して退治するのである。そして沙悟浄はそれほど水中で暴れない。

猪八戒の前歴は西遊記に述べられている。本来イノシシでもブタでもなく、それなりに修行して



中国古典文学大系 31.32巻  
「西遊記」の挿絵より

天上に昇り、天の川の水軍の大將として天蓬元帥の名を得ていた者なのだが、酒に酔った勢いで、嫦娥（じょうが）という女神にしつこくたわむれ、セクハラの罪で天上を追われ、ブタの胎内に宿ってあの姿になったのである。菩薩は猪悟能（八戒の旧姓）に向かって、心を入れ替え戒律を守っていつか来る西国へ取経に向かう僧に従うならばこれまでの罪は償われるであろうと述べ、以後この化け物はまともな人間になろうと精進を守り五葷三厭（仏教で言う精が付き性欲のもととなる野菜……ニラ、ニンニク、ラッキョウ、アブラナ、コエンドロを五葷という。禅寺にも「不許葷酒入山門」葷酒山門に入るを許さず……葷は許さざるも酒は山門に入れ、と読む困った人もいる……とある。三厭は道教で食べるのを禁じている雁、イヌ、ヤツメウナギ）を絶ってひたすらに三蔵法師を待つのである。

こうして八種の食物の戒めを守ることから、猪八戒の名が生まれる。この戒めが食物につながるどころがいかに雑食性で食い意地の張った人間、でないブタ、そして猪八戒の行動に直結する。

さて猪八戒、その前身は天の川の水軍の大將、天蓬元帥はさらに調べていくと、仏教に出てくる摩利支天の部下であることがわかる。摩利支天とブタとの関わりについては1995年に出た「猪八戒の大冒険」（武田雅哉著・三省堂刊）にかなり詳しく述べられており、本文にも数多く引用させていただいている。日本では摩利支天は江戸時代に大黒天、弁財天と並び三天と言われ信仰を集めていたのでご存じのかたも多いと思う。

ところで摩利支天のルーツはインドでの太陽や月の光の象徴である女神、マリーチである。このマリーチが中国に渡ると道教神の女神、斗母元君

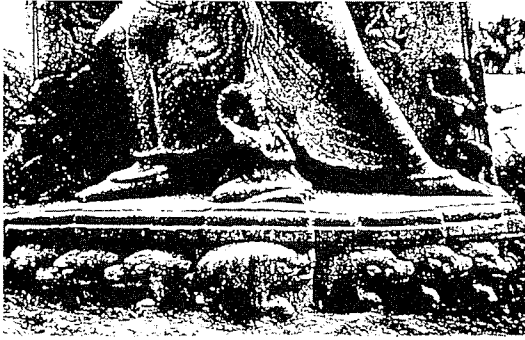
となるのだが、これは北斗七星の母とされている。

インドやチベットのマリーチ像は7匹のブタが支え、あるいはブタの曳く乗り物が台座となっていて、北斗七星との関連を思わせる。現に漢訳された仏典「仏説大摩里支菩薩經」の中にマリーチは黄金のブタの上に坐っていて、ブタの群れが取り囲む、あるいはブタの曳く車に乗っている。童女の顔をしているが、三面のうち一面がブタの顔になると述べている。明時代刊行の「仏説摩利支天經」の扉絵にも同様の絵が描かれ、三面のうち向かって右側がブタの横顔になっている。やはりブタの親玉？なのである。これが日本に伝わり、日本人の手で描かれると、聖武天皇以後ブタの飼育がなかった故か、摩利支天を支えるのはブタから野生イノシシに変化してしまっている。ここに示すのはいずれも江戸時代の絵である。

なお、インドにはマリーチ以外にもブタの顔をした神様がいます。ヒンドウ教のヴィシュヌ神は世界維持の神とされ、いろいろなものに化身して活躍するのだが、かつて悪魔によって水没した大地を水の上に引き上げたのがヴィシュヌの鼻の穴から飛び出して巨大化した黒いイノシシの働きであったとされている。他にもイノシシが大地を持ち上げる神話はいくつかある。

八戒、あれやこれや……

さて、猪八戒に話を戻そう。西遊記全100回を読み通して感じるのは八戒の博学知識である。妖怪退治のおもしろさのほうに目を奪われてしまうが、八戒の博学知識はかなりのもの、つまり相当なインテリなのである。三蔵法師の一行が秋も終わりのころというのにものすごい暑さに参るシーンで、八戒は太陽の沈む地、火焰山が近いと語っ



インドのマリーチ像



イノシシに化身したヴィシュヌ

悪魔によって水没した大地を元に戻さんとイノシシに化身して悪魔を殺し、大地を持ち上げるヴィシュヌ。水に緑のある動物と考えられている。



チベットのマリーチ像

台車の下には七匹のブタが描かれている。

日本でのマリーチ (摩利支天)

野性の猪になっている。



「古今沿革考」に見える摩利支天



「図像抄」に見える摩利支天



三面六臂のマリーチ像

台車ブタ以外に、周囲に七匹のブタが描かれている。

本ページの図版はすべて「猪八戒の大冒険」(浅田雅哉著)より

ている。(筆者も気になって、近くこの火焰山を訪ねる。実際は赤い岩山らしい。) 八戒は物知りなのである。

それにも増して感じられることは、この八戒、努力をし修行を積んで猪悟能、よく悟ると名付けられたにしても、随所に顔を出すのが大食い、そのあげくの居眠り、そして異性への弱さである。これが何ともユーモラスで人間臭く、馬鹿にされながらもなぜか親しみを感じさせる原因ではなからうか。

ある人に言わせると、ブタの生活は食って寝て、異性と交わる、これは人間の願い楽しみの究極の姿ではないか、それを捨て切れぬおのれの弱さをブタに反映し、ひいてはブタへの悪態につながるのではなからうか、ということになる。

さて、この猪八戒、西遊記の中でもすねたり、ふてくされたり、師である三蔵法師に反抗したり、苦しくなるとすぐ“おれたち解散してもう帰ろうよ”と言い出す。われわれ人間の日常生活について出てくる言葉を片一端から口に出すのである。

そして14年もの辛苦の旅の末に経典を中国に持ち帰ったとき、その功績により三蔵法師は「梅檀功德佛」、孫悟空は「闘戦勝佛」と仏の位に叙勲されるのに対し、八戒は「浄壇使者」つまり仏壇へのお供え物(食べ物)を片づける役を如来から言い渡される。このとき、やはり仏になれなかった沙悟浄は黙っているのに対し、八戒は如来様に向かって大声で不平を鳴らすのである。「他の者はみんな仏になったのに、私だけがどうして“浄壇使者”なんです！」これが西遊記第100回のラストシーンである。

この挫折感、これこそが今なお多くの勤め人の、いや多くの人々が味わうものであり、妙に実感を

もって読者に迫ってくるのではあるまいか。考えようによっては西遊記はユーモア、冒険、そして教訓も含みつつ何ともリアルな文学で、その中心が猪八戒と言えるかもしれない。

ここまで述べたのだから西遊記のブタ、猪八戒についてあといくつかの情報というか実情?をお知らせしておこう。

まず八戒は黒ブタだったということ。これは中国の在来種の毛色から見ても当然であろう。今でも中国人のブタのイメージは黒毛が色濃く残っており、その黒さからブタのことを烏金、烏大将、黒面郎と呼んでいることからわかる。

ところが家畜化による体色の変化はこの八戒の姿にもあらわれ、明の時代に刊行された西遊記の挿絵の多くが白ブタになっている。これは中国のブタに関する他の図版や絵にも見られる現象であって、ブタの色も世につれ、ということになりそうである。それに、以前の中国のブタの絵も八戒の絵も今のように肥っていない。大食漢であるにしても身体の大きさを示しているだけで、肥満体ではないのだ。むしろ妖怪たちが食べようと狙っているのは、肥った坊さん“胖和尚”すなわち三蔵



『孫悟空とアトム』より  
出典：『猪八戒の大冒険』(浅田雅哉著)

法師のほうだったのである。近頃の女性誌のダイエット広告の比較写真を見ると、昔と今の八戒いやブタを思い浮かべてしまうのは果たして筆者だけであろうか。

こうして、あまりにも人間くさいキャラクター猪八戒は、西遊記以後も、その後の猪八戒といった題の多くの物語を生んだのである。

「後西遊記」(1710年頃)には八戒の息子の一戒が登場するし、1906年の「神封神伝」には何と八

戒は日本の法政大学に留学するのである。ひどいのは1909年の「新西遊記」、近代都市上海にやってきた三蔵法師一行はもうめちゃくちゃで、三蔵が阿片中毒になるのだから、まさしく魔都上海ではある。最近の漫画「孫悟空とアトム叢書」(1990年)には、鉄腕アトムと孫悟空、そして猪八戒も登場する。もちろん肥満体の八戒である。

話はきりが無い。紙数も尽きたので今回はこれぐらいで……。